

徳大の特許 塩野義が製品化

脳卒中の新薬開発へ

後遺症を緩和

徳島大と製薬大手の塩野義製薬（大阪市）が、脳卒中の後遺症で手足がこわばったり突ったりする「痙縮」を緩和する新薬の実用化に乗り出す。24日、大阪市の塩野義製薬本社で会見して発表した。徳島大が製薬会社と新薬開発するのは初めてで、徳島大が特許を持つ薬剤を元に、塩野義が製品化する。国内で痙縮に悩む約112万人の苦痛を軽減することが期待される。

徳島大などによる「ボツリヌス菌の毒素を」と、痙縮にはこれまで「使って筋肉の緊張を和

くることがある（な授）らは2005年からの新薬を研究し、乳児ボツリヌス症の患者学研究部の梶龍児教授と小崎俊司客員教授（当時大阪府立大教

発。15年までに徳島大が注射後1週間程度で立てるようになり、リハビリを経て歩けるようになった例もある。データでは、大半の人が1週間以内で効果を実感でき、1度の注射で3カ月ほど効果が持続した。また従来のボツリヌスでは60日後に足に注射した患者の手の握力が低下する副作用があったが、A2NTXでは握力にほぼ変化がみられなかった。薬が拡散せずに注射した箇所にとどまることも分かった。寝たきりだった患者が注射後1週間程度で立てるようになり、リハビリを経て歩けるようになった例もある。創業支援事業に取り組み大阪商工会議所が仲立ちし、徳島大と塩野義が、徳島大の特許を使うライセンス契約を結んだ。塩野義は新薬の基礎研究に必要な多額のコストを省け、徳島大は特許料収入が見込める。今後、塩野義は安定供給するための技術開発を経て、19年ごろから新薬として承認を受

（三浦麻衣）



らげる薬剤「ボツクス」が使われてきた。しかし、ボツクスの主成分である「A1型」の毒素は▽毒性が強く大量に用いた場合の安全性に問題がある▽1力所に注射しても他の筋肉に拡散する▽抗体ができやすく、継続使用すると効果がな

会見で握手する（左から）梶教授、野地澄晴、徳島大学長、手代木社長、小崎客員教授、大阪市の塩野義製薬本社